

「元海兵隊員による残虐な蛮行糾弾！被害者を追悼し、海兵隊の撤退を求める県民大会」  
に参加して

6月18日（土）

13時、恩納村安富祖（あふそ）の雑木林の女性暴行殺人死体遺棄現場に着く。被害女性を追悼した。現場は、那覇市と名護市を結ぶ国道58号線から県道104号線に入り、車で5分くらい走ったところで、追悼しに来られた方が「こんなに近くに遺棄されていたとは」



と驚いていた。私も手を合わせ被害女性を追悼した。たくさんの被害女性を追悼する花束がたむけていた。その中にはスナップ写真もあり、被害女性の友人たちが、思い出を惜しむように置かれていた。

追悼に来ていた67歳の男性が報道関係者に「私の娘は海兵隊員と結婚した。6か月サイクルで沖縄に来るので、とにかく結婚したいと言い寄ってきた。結婚して、子どもが生まれると、子育てには関心がなく、私の妻が手伝っているという実情だ」と、日常的な海兵隊員との複雑なつながりを話していた。

この県道には、米軍の関係車両のYナンバーがひっきりなしに通行しているが、搭乗者の誰一人として、遺棄現場を見ようとしないうちに、驚きと怒りを感じた。

6月19日（日）

「元海兵隊員による残虐な蛮行糾弾！被害者を追悼し、海兵隊の撤退を求める県民大会」。主催は辺野古新基地を造らせないオール沖縄会議、14時～15時30分 那覇市奥武山公園陸上競技場にて。参加者6万5千人。

参加者は、黒い服や帽子、傘を身に着け、被害女性への哀悼の意思と二度と事件を繰り返させないという決意を安倍政権とオバマ政権に突き付けた。

大会の最初に、古謝美佐子さんが「童神（わらびがみ）天の子守歌」を独唱した。静寂の中、鎮魂の雰囲気包まれた。

次に、参加者全員で黙とうした。被害女性の父親が「なぜ娘は殺されなければならなかったのか。次の被害者を出さないためにも全基地撤去、新基地建設断念は県民が一つになれば可能だ」というメッセージを大会に寄せ、紹介された。このメッセージは、参加者の無念さ、憤り、行動への意欲を指し示すものとなった。

共同代表の稲嶺進・名護市長が「71年前から変わることなく、県民の人権が無視され、多くの犠牲が押し付けられた実態があらわれている。私たちの力で二度とこのような事件を起こさないことを誓い、行動を起こし、みんなの心を一つにして頑張っていきたい」と決意を表明した。

続いて、共同代表の呉屋守将・金秀グループ会長が「いったい何名の犠牲者を出さないと沖縄の苦しみを分かってもらえないのか。安倍総理、あなたは国の最高権者として一人一人の命を預かる責務がある。この71年間、そして5月に起こった被害者の事件、これらについてどのような責任をとるつもりなのか。遺族、そして県民に真剣に向き合って心から謝罪すべきではないのか」と安倍首相を厳しく糾弾した。

そして、高里鈴代さん（基地・軍隊を許さない行動する女たちの会共同代表）は、「辺野古の新基地に軍隊が駐留し、殺りくと破壊の訓練を受け、世界の紛争に出掛けていく。そのような場所をさらに沖縄に置き続けていたら、今回の女性の被害と同じように新たな被害を生んでしまわないか。私たちは今声を上げることのできない女性の声しっかりと耳を澄ませて聞こうではないか。埋もれている声も呼び起こしてその声を集めて、新たな基地建設や海兵隊の駐留をこれ以上認めないという思いにつなげていきたい」と決意を表明した。



シールズ琉球メンバーで名桜大学学生の玉城愛さんは、次のように訴えた。

「被害に遭われた女性へ。あなたとあなたのご家族、大切な人々に平安と慰めが永遠にありますように。私も祈り続ける。安倍晋三さん、本土にお住いの皆さん、今回の事件の『第二の加害者』は誰か。あなたたちだ。しっかり沖縄に向き合っただけじゃないか。いつまで私たち県民はばかにされているのか。再発防止や綱紀粛正などという使い古された幼稚で安易な提案は意味を持たず、軍隊の本質から目をそらす貧相なもの。オバマさん、アメリカから日本を解放して。私たちは奴隷ではなく、あなたや米国市民と同じ人間だ。



一人一人が大切にされる社会とはどんな形をしているのか。同じ世代の女性の命が奪われる。もしかしたら私だったのかもしれない。私の友人だったのかもしれない。信頼している社会に裏切られる、何かわからないものが私をつぶそうとしている感覚は絶対に忘れない。彼女が奪われた時間の分、私たちは一人の市民として誇り高く責任をもって生きてい

こう。もう絶対に繰り返さない。人間の生きる時間の価値、命には深く誇るべき価値があるんだという沖縄の精神を声高々と上げていこう」。

安倍晋三氏と本土の住民は、「第二の加害者」という訴えは、心を突きさすものであった。沖縄県民に向き合い、寄り添った反基地運動、反戦・平和運動の構築こそそが、われわれに迫られているのではないのか。



翁長知事は、県民大会に先立ち、今回の事件で被害女性が遺棄された現場に行き、花を手向け手を合わせて「あなたを守ってあげられなくてごめんなさい」と謝罪した。大会のあいさつでは「21年前、あの痛ましい事件を受けた県民大会で二度とこのような事件を繰り返さない」と誓いながら、政治の仕組みを変えることができなかった。政治家として、知事として、痛恨の極みだ」と自ら厳しく戒め、「兇悪な事件が継続して起きたことは、広大な米軍基地があるためだ」、「政府が普天間飛行場の周辺住民の生命や財産を守ることを優先するならば、辺野古移設の進捗に関係なく普天間飛行場の運用停止を実現すべきだ」、「このような事件が二度と起きないように、県民の先頭に立って取り組む」、「(政府の) 大きな壁に立ち向かっていく」、「グスーヨー、マケテナイビランドー (皆さん、負けてはいけませんよ)」と訴えた。



大会の最後に、①日米両政府は、遺族および県民に対して改めて謝罪し、完全な補償を行うこと、②在沖米海兵隊の撤退及び米軍基地の大幅な整理・縮小、県内移設によらない普天間飛行場の閉鎖・撤去を行うこと、③日米地位協定の抜本的改定を行うこと、を要求する大会決議を採択した。

この県民大会に参加して、1945年の敗戦から71年、1995年の米兵の少女暴行事件から20年たっても、米軍基地があるために、沖縄県民は過酷な被害を受け続けている実態を、大阪でも訴えていくことの重要性を実感した。

